［編集後記］

『社会科学ジャーナル』第51号をお届けします。

今回は論説として、ルカス批判を計量経済学の手法によって応用し、輸出主導型経済成長仮説を再評価した黄仁相所員による論文、太平洋戦争中には強制収容所に送られた日系移民を励まし、戦後は本学の創設に尽力した湯浅八郎博士に関する武田清子顧問による論文（4回連作の第3回目）を収めました。

また研究ノートとしてOECDの資本計測に関する石渡茂所員の論文、インプライド・ボラティリティに関する竹澤伸哉所員の論文を収録しました。さらにThomas Lux氏およびSung Jin Kang氏、斎藤淳の3氏による公開講演の要旨を掲載しました。

さて長い間親しまれてきた『社会科学ジャーナル』の表紙ですが、ただいま来号から新しいレイアウトで発行しようと準備中です。この夏は編集委員の竹澤伸哉所員と本研究所助手の皆さんの尽力により、くり返し企画が練られました。本号がお手元に届くころには、斬新な表紙デザインの見本が出来上がっていることでしょう。ぜひ次号を楽しみにお待ちください。

むろん表紙だけでなく、今後とも『社会科学ジャーナル』の内容を充実させる努力を積み重ねて行きたいと考えています。皆様の忌憚なきご意見およびアドバイスを頂ければ幸いです。

（文責　菊池　秀明）